

猫神様が 恋心預かります

フドワーリ野土香 Földvári Nodoka



アルファボリス文庫

序章 雪の夜の参拝者

ふわり、ふわりと羽毛のような雪が降りてきた。空を泳ぐように舞い、遊んでいる。小さなひとつひとつに、命が吹き込まれているみたいだった。

目の前に漂う雪に、つい手を伸ばしてしまった。触れたら消えてなくなる。一瞬だ。わかってはいるけれど、やっぱり触らずにはいられない。もどかしい。

どうりで寒いわけだ。そうか、初雪か。

あくびをすると、雪よりも濃く白い息が目の前に広がった。

雪がそつと鼻先に乗る。白い姿を確かめる前に、オレの体温であつという間に溶けて消えた。でも、まだ鼻先に残っているみたいに冷たい。オレの尻尾が微かに揺れる。

「恋なんて……」

女の声がした。耳元で囁かれたみたいに、ゾクツとした。全身の毛が逆立つ。

びっくりして、声のした方を見る。人間の気配なんて、さっきまでなかったのに。

「恋なんて、いらない」

女は覚束ない足取りでゆっくりと鳥居を越え、社の方へ近づいてくる。

女は身体からだを小刻みに震わせながら、賽銭さいせんをそっと投げ入れた。そして言った。「もう二度と、恋はしません」と。

「だからどうか……お願いします」

賽銭箱の前で女はしゃがみ込み、空を見上げる。降雪はさらに勢いを増し、あらゆるものを白で染めていった。女の吐く息が見える。もう日暮れなのに明るく見えるのは、雪のせいだろうか。

黒い髪に、腫れた瞳。頬には涙の跡。ここに来るまでにずいぶんと泣いたようだ。女にそっと近寄ると、オレの首輪の鈴が揺れた。

——リン。

女と目が合う。

「あなたが……猫神様？」

自分でそう言っておいて「そんなはずはないよね」と哀しそうに微笑ほほえんだ。

女は震える指先をオレに伸ばす。

触らせてなるものか。

オレは尻尾をゆらゆら揺らして、警戒している素振りそぶを見せた。

女はなにを思いついたのか、肩にかけていた鞆たもとの中に手を入れる。カサカサと音がした。すぐに、小袋を取り出す。煮干しだ。

若い姉ちゃんの鞆から煮干し。なんで、そんなもの。

女は笑顔で「ほら」と煮干しをオレに差し出して手招きしている。心の中で散々バカにしてから、煮干しを口に銜くはえた。

女から、小さな光の玉が踊るように飛び出す。それは雪とじゃれ合いながら漂うと、オレの首輪の鈴の中へと消えていった。

「雪みたいに、真っ白だね」

煮干しを食らうオレを見て言い、女は立ち上がった。さつきとは別人のような足取りで、神社に背を向け去っていく。オレはただじっと、女の後ろ姿を見送った。

煮干しの味が口いっぱいに広がる。うまかった。

第一章 猫神様と泣きぼくろ君

「恋が叶いますように」

単純すぎる願いだな。

「ソウスケくんと結婚できますように」
相手の意見あつての結婚だろうが。

「あたしの気持ちに振り向いてくれますように」
知らん。自分で伝えろ。

人間の悩みは尽きないらしい。ひとつ叶えば、またひとつ。欲深い生き物だ。

毎日人間は飽きもせず、努力もしないでオレのところへ来て賽銭を投げ、むちゃくちゃな願いを吐いていく。だが、願いをかける形だけはしつかり守る。鈴を鳴らし、二回礼をし二回手を叩き、願いを言つてまた礼をする。神社の前の鳥居で礼をする人間も多い。人間は、神様仏様と願うのが本当に好きな生き物だ。

見てわかる通り、オレは猫である。しかし「吾輩は猫である」と言つた猫とは違う。ただの猫ではない。神様だ。

猫はネズミを捕まえる。今も昔も変わらない。神社が建てられたばかりの頃は、病や害を食べる神様と呼ばれ、祀られていた。しかし時代は過ぎ去り、時と共に変わっていく。平和をもたらす神だつたオレが、いつしか恋を叶える猫神様と呼ばれるようになっていった。

「ご飯ですよ」

山盛りの飯を両手にやつてきたのは、公子だ。今朝はいつもより早い。

にゃあ、うにゃ、と丸まって寝ていた猫たちが、一斉に尻尾をピンと立てて公子にすり寄っていく。

公子が目を細めると、目尻に年季の入った太い皺がはつきり浮かんた。

皺が増えた手で、オレの頭を撫でた。公子の手が一番撫でられて気持ちがいい。この節が太い公子の手に撫でられたときだけ、ついゴロゴロと喉が鳴ってしまう。

オレの社——野良神社には神主がない。代わりに近所に住む公子が、神社の掃除をしている。誰からも頼まれていないが、公子のばあさんの代から善意でやつてくれる。オレたち猫の世話もそうだ。ちゃんと朝と夜の二食、飯の用意をしてくれる。

もともと、名もない小さなボロ神社だつた。野良神社と呼ばれるようになったのは、昔から野良猫が居ついていたからだ。野良だけじゃない。飼ひ猫もたまにエサをもらいに来る。ここは、猫が居つく猫神社なのだ。今はオレを入れて五、六匹くらいの猫たちが神社を住処にしている。

公子とは、生まれたときからの仲だ。頑固で、おてんば娘。小さい頃は母親に叱られ泣いたり神社の中を駆け回っていたりしていた。それがどうだ。今じゃもう、腰が曲がつた白髪の立派なばあさんだ。このご時世なのに、孫が八人もいる。公子の樂しみは、年に数回孫たちが遊びにやつてくることだ。

なぜわかるかって？

孫たちが遊びにやってきたときの飯は、いつにも増して豪勢だからだ。

人間の寿命は短い。花みたいだ。幼かった公子はあつという間に年を取り、いつこの世を去るかもわからない。オレのように長生きするのがいいことは思わないが、それにしても人間の命は短すぎる。公子がこの世を去ったあと、誰が神社の管理をしてくれるのだろうか。公子の子どもたちは、みんなこの地を離れている。神社はなくならないう。でも、願いをかけに来る人間たちは知らない。野良神社は、公子あつての神社だということを。

願いをかけていく人間たちの声は、どこにいても聞こえる。神社にいてもいなくても、だ。オレは、いつも人目につかない神社の片隅でひっそり願いを聞いている。公子が作ってくれた座布団ざぶふとんがあつて、のんびりするのちよよい。これが日課だ。野良猫たちはみんな人馴れしているので、猫に癒いやされに来る人間もいる。でもオレは、人に撫でられるのが好きではない。だから誰にも邪魔されない場所で、人間たちをじっくり観察させてもらっている。

一言言っておくが、オレは他の猫たちとは違う。飯を食ってゴロゴロして、毎日気楽に過ごしているわけではない。人間の言葉だつてわかる。「ご飯」とか「おやつ」の言葉だけを知っている、普通の猫と同じにしないでもらいたい。しつかり、ちゃん

と、人間の言葉の意味を理解している。それでも、一応神様だ。

オレにとって人間は、二種類に分類される。ひとつは、自分自身で願いを叶えられる人間だ。大抵の人間は、自分に無力さを感じている。自分に与えられた力量を知らない。だから、神頼みなんてしたがる。

でも、オレに言わせればほとんどの人間がこのタイプだ。自分の願いは自分で叶えられる。ここへ来て願いをかけ、自分自身で願いを成就じょうじゅさせて「神社のご利益りやくだ」と喜ぶ。そして噂を広めてくれる。野良神社は恋愛成就の神社だ、と。毎日、商売繁盛はんじょうである。

そういう奴らが願いを叶えられる力があつても叶えられないただひとつの理由は、諦めだ。自分の力量を自分で勝手に決めてしまう。結果、願いは叶わない。

もうひとつのタイプの人間は、自分ではどうにも願いを叶えられない奴らだ。オレの仕事は、自分で願いを叶えられない人間の手助けをすること。だが、さっきも言った通り、このタイプの人間はほとんどいない。だからあんまりにも退屈で死にそうになったときに限り、分け隔てなく平等に神として人間の手助けすることもあったり……なかったり。

それからもうひとつ。恋に破れ、傷を負った人間の痛みを取り去るのもオレの仕事だ。特にひどく傷ついた人間は、オレの元に恋心を置いていく。時間をかけて傷を癒

やし、また恋がしたいと思ったとき、持ち主に返してやる。「恋なんてもう二度としない！」と恋心を置いていっても、取りに戻ってくる人間がほとんどだ。恋なんてもうしないなんて、大嘘だ。ただ稀に、本当に二度と戻らない奴もいる。よっぽどひどい目に遭ったんだらうな。

恋に関する悩みは尽きないし、恐ろしい数の人間が日々願いをかけていく。頭が爆発しそうだ。できれば普通の猫みたいに、飯のことだけ考えて日がな一日ゴロゴロしていたい。オレの願いを叶えてくれる奴は、いないのか。

さて、実はここ数年、オレは仕事をしていない。くだらない恋の願いばかりで、仕事する気さえ起きないっていうのが本音だ。だいたい、みんな自分で叶えられる願いだ。神頼みなんてしてないで、てめえで叶えやがれ。

それでも一応神様だ。なにかしら仕事はしなければならぬ。それならば、誰の願いを叶えるか。人間の見た目や願い事から、さっき言ったふたつのタイプを見極めるのは難しい。とりあえず、願いの内容に耳を傾け続けるしかない。

「お願いお願いお願い、お願いっ」

お願いという言葉だけを、延々と心の中で繰り返している。

面白い奴が来た。

「お願いします！ お願いお願い……」

お願いの、中身を言え。

そっと、男の顔を社の陰から覗く。見たところ、十代後半くらいだろう。茶色い髪、右の目元にはほくろ。きようはずいぶん寒い。それなのに、泣きぼくろ君は上着も着ないで擦り切れたトレーナー姿で必死に願っていた。寒さのせいか、頬が赤い。それとも興奮しているのか。

「お願いお願いお願いお願い、お願いします！」

だから、お願いの中身はなんだ。

泣きぼくろ君は、手のひらから火でも起こせそうなくらい、一生懸命こすり合せている。それからすぐにパッと顔を上げると、口元をだらしなく緩め、神社を立ち去った。これで、願いが叶ったと勘違いしているのだろうか。

こうして見ていると、人間の表情は面白い。眉間に皺を寄せ真剣に願う奴もいれば、形だけ祈ってなんにも願わない奴もいる。ご丁寧に名前と住所まで伝えてくれる奴までいる。泣きぼくろ君のように、願ったあとにニヤついて帰る奴も多い。願ったあとにニヤついて帰る奴は、ここに願いに来たらなんだって叶うと勘違いしているの、大抵は叶わない。

結局、泣きぼくろ君は「お願い」だけかけていって、中身は言わなかった。バカだな。願いの詳細を心の中でも言わなきゃ、さすがに神様だって叶えられ

ないだろうが。

しかし、面白い。

神社を訪れる男女を比例すると、圧倒的に女が多い。特にここは恋愛成就の神社だ。年齢に幅はあるが、女ばかりがやってくる。たまに男も来るが、大抵はカップルで訪れる。「いつまでもラブラブでいられますように」という、自己満足的な願い事をして帰る。そんなものの、願い事でもなんでもない。

丁寧に全身を毛づくろいして、満足したら眠ることにした。面白そうな奴が来たけれど、きょうもオレの出番はなさそうだ。

「三十歳になるまでに結婚させて！ お願いつ！」

まずは相手を見つける。そこまでオレの世話になるつもりか。

……やれやれ。

昼間はうとうとしていても、人間たちの願いが頭の中でひっきりなしに聞こえてくる。眠れない。目を閉じたまま、ただ人間の声だけを聞いていた。

夕方になると、また公子がやってくる。夕飯の時間だ。

「今夜はちよつと冷えるねえ。温かくするんだよ」

撫ですぎず、足りなさすぎない。ちよつどいい撫で方。公子のよしよしは、日本一

だ。他の猫たちにとっても、公子は特別な様子だった。

食べ終わり、満足しながら夜空を見上げる。月が大きく、まん丸だ。雲の途切れから月が顔を覗かせるたび、この小さな神社をぼんやり照らす。風が吹くと、木々が揺れた。なにかを囁き合っているみたいに聞こえる。

都心の真ん中にある野良神社には、星の光が届かない。それでも、冬だけは違って見える。夏の星よりも、冬の星の方が輝いて見えるのはなぜだろう。都会の光に埋もれる夜空でも、星が美しく瞬く。「空気が冷たいと星が綺麗に見えるのよ」と公子は冬がやってくるたび必ず言っていた。本当だ。

囁き合う木々の向こうから、荒い吐息が聞こえた。誰か、来る。気配を消すなんて微塵みじんも考えていない足音が、近づいてくる。

たまに、夜中に人目を避けるようにして願いをかけに来る人間がいる。そういう奴らは、自分ではもうどうしようもできないと切羽詰せつぱつまって、最終手段として神頼みしに来る。願いを叶えてほしい人間か、はたまた夜の神社に身を隠す変態か。どちらかだ。鳥居をくぐり、やってきたのは泣きぼくろ君だった。一瞬、なぜか公子かと思った。どことなく匂いが似ている。でも、全くの別人だ。

「……もう俺、神様にしか頼ることができないんです」

なんだ。泣いているのか。

顔中ぐちゃぐちゃにして、泣きぼくろ君はしゃくり上げながらオレに頼み込んだ。「お願いします。どうしても俺、彼女を諦められないんです。彼女じゃなきゃ、ダメなんです……」

片想いの女がいるのか。昼間にちゃんと願ひ事の詳細を言ってくれたらよかったのに。

オレが願ひを叶えるのは簡単だ。願ひ事の詳細を聞き、あくびをひとつしてから右耳の後ろを掻けばいいだけ。嘘だと思いかもしれないが、本当の話だ。もつとも、叶えられるのは恋の願ひだけだな。

泣きぼくろ君は、子どもみたいに泣きながら賽銭箱の前に蹲^{うずまつ}った。苦しそうに泣いて、しゃくり上げている。あまりに痛ましいその姿に、つい、頭を手でポンと叩いた。

「……へ？」

涙と鼻水まみれの顔で、オレを見る。目が、バチツと合った。

「猫ちゃん……どうしてこんなところに」

泣きぼくろ君は涙と鼻水を袖で拭^{ぬぐ}い「よししょ」とオレを持ち上げた。

やめろ、下ろせ！……つちよ、鼻水つくだろ！

「首輪ついてるじゃん。飼い主さんは？」

さてはこいつ、猫神様の存在を知らないでお参りに来たな。

「飼い主さん、捜してあげるよ。きようは寒いし。俺の家に来なよ」

さつきまで泣いていたのに、今は笑っている。忙しい男だ。

オレは泣きぼくろ君に抱きかかえられたまま、野良神社をあとにした。野良猫たちは、のんきに眠ったままだった。

第二章 三窪恭介は全力で恋をする

無我夢中で、走った。空気が冷たい。肺が痛む。それでも足は動き続ける。自分でもどうして走っているのか、よくわからなかった。

暗い夜道に寂しく街頭が灯る。人気がない道路の白線だけを頼りに、とにかく走った。涙のせいか街頭の明かりが霞^{かす}んで見えた。

行く当てはない。ただ、走っているだけ。走れば、なんだって忘れられるような気がした。でも無理だ。海に浮かぶ流木のように、言葉が頭の中にぶかぶかと浮かんでいた。

——ごめんなさい、気持ち悪いです。

気持ち悪い。きもちわるい。キモチワルイ。

俺——三窪恭介の中で言葉が幾度も変換されて、ぐるぐる回っていた。

うおおおおおおお！ と叫びたくなる。叫んでも、言葉が消えるはずがない。

急に、視界がスローモーションになった。ああ、俺、転んだんだ。転んでるんだ、今頭の中では、いたって冷静だった。

べちゃっと地面に叩きつけられると、懐かしい痛みが全身に広がった。子どもの頃は、よく転んで泣いたっけ。どうでもいいことを、不意に思い出した。

恋愛成就の神社の前だった。友達^{あんず}の杏子ちゃんから「恋が叶う神社だよ」と聞いていた。昼間、告白が成功するよう願掛け^{がんかけ}しに行ったのに。叶うどころか玉砕^{ぎょくさい}ではないか。しかも、なんでこんなところでしょくよく転ぶんだ。

池谷^{いけたに}邑子^{むねこ}さんは、俺にとつて可憐^{かれん}に咲く一輪の花みたいな存在だ。

「初めて会ったときから好きでした！ 付き合ってください！」

嘘偽りのない、心から素直に出た言葉だった。誰かが本気で気持ちを伝えたらそれは必ず相手に伝わって、叶うものだと思っていた。

……しかし。

「ごめんなさい」

彼女は、俺の目を一切見なかった。チラッと見えてくれなかった。

断られたって、俺は気にしない。告白は一回だけと法律で決まっているわけではない。何度だって挑戦できる。だが次の瞬間、爆弾は落とされた。

「気持ち悪いです」

俺のなにがいけなかったのか。なにを間違えたのか。どうして気持ち悪いと言われるしまったのか。

震える足で、鳥居をくぐった。暗がりでも赤い鳥居は目立つ。昼間はたくさんの人がいたけれど、日が沈むと寂しさが溢れている。それに、サラサラと音を立てる木々と夜の社に薄気味悪さも感じた。

「……もう俺、神様にしか頼ることができないんです」

ポケットの中に手をつ突っ込んで、五円玉を探した。さっき、コンビニでお茶を買っておいでよかった。お釣りの中にちょうど一枚だけあった。

「お願いします。どうしても俺、彼女を諦められないんです。彼女じゃなきゃ、ダメなんです……」

俺は、両手を合わせながら願った。

これがおとぎ話だったら。俺が王子様で、邑子さんはお姫様だ。善は勝つし、悪は負ける。絶対的なハッピーエンドがある。必死に願って顔を上げた瞬間、神様が現れ

て俺の願いを叶えてくれる。そう、ランプの魔神みたいに。三つも願いを叶えてくれなくていい。たったひとつだけ。邑子さんと両想いになる。それだけでいい。残りのふたつの願いは、誰かにあげたっていい。どっかのアニメみたいに、魔神を自由にすることだってできる。

俺のなにがいけなかったのか。そうだ、思い返してみよう。初めから。最初に出会ったときから。

* * *

邑子さんは、俺がアルバイトとして勤める店の常連客だった。俺のバイト先は書店で、レンタルDVDや書籍を取り扱っていた。

邑子さんに出会ったのは忘れもしない、今年の春。桜はもう散り、青々とした葉だけが残る季節だった。

今でも鮮明に覚えている。書店に入った瞬間から、邑子さんはひとりだけスポットライトを浴びていた。

このとき人気絶頂だった『いとしく想う』が店に大量入荷され、邑子さんはその本を手を取っていた。本を持つ彼女の指の一本一本が美しかった。

書店員が本の感想を書いて客の購買欲を高める『いとしく想う』のPOPには、こんな純愛、今はない。あなたも誰かのことを想ってみたくなる一冊！と目を引くよう大きく書いてあった。彼女はそれをじいっと、穴が開くほど見つめていた。

彼女が手に取って戻した本を、俺が買った。大量に山積みになれた本の中でも、邑子さんが触れたただ一冊だけ、大粒のダイヤモンドのように輝いて見えた。鉾山から寶石を掘り当てたような気分だった。

本を立ち読みしていた邑子さんの横顔が、忘れられなかった。本を見つめる儂げな眼差しと、黒く長い漆黒の髪。黒髪をより強調したのは、しっとりとした白い肌だ。まるで、現世の白雪姫のように見えた。桜の花びらのような爪先も、脳裏に焼き付いて離れない。

邑子さんが去ったあと、俺はどうしても彼女にこの胸の高鳴りを伝えたかった。思い切って、POPに付け足した。〈この前立ち読みしていたお姉さん。横顔がとても素敵でした〉と加えたら、店長に「次やったらどうなるかわかるな」と言われてしまい、しぶしぶ元に戻した。さすがに、バイト先を失うわけにはいかなかった。

一目惚れなんて、絶対にしないと思っていた。一目惚れとはつまり、外見に惹かれただけだから。でも実際は違う。邑子さんに一目惚れしてよくわかった。彼女の美しさは、外見だけではない。彼女の内面からにじみ出る美しさが、外見をより輝かせて

いるのだ。あんなに美しい人が、性格ブスなはずがない。おしとやかで、上品で、きっと誰に対しても優しい。地上の天使とはまさに、彼女だ。

俺は話したこともない邑子さんに、絶対的な、根拠のない自信を持っていた。

邑子さんは、週に数回バイト先に現れた。最初は、見ていただけでよかった。きょうは来るかな、あしたはどうか、と毎日そればかり考えていたくらいだ。

でも次第に、見かけるだけでは不満になっていった。

声をかけたい。話したい。近づきたい。

夏休みが始まる前、俺は邑子さんにどうやって声をかけようかとうずうずしていた。居ても立つても居られない。日に日に増していく自分の中の想いを、もう留めておけなかった。しびれを切らし、担当でもないのに邑子さんがレジに向かったとき、さすが横入りをしてレジを打った。

「この前『いとしく想う』を立ち読みしましたよね?」

「そう……でしたっけ……?」

小さい声でそう言って、お金を払うと逃げるように帰ってしまった。

「ナンバしてんじゃねえぞ」

三浦さんにコツンと頭を叩かれる。あれは結構痛かった。本気だったと思う。

三浦さんは社員さんだ。大学を卒業後、二年ここで働いている。

「……すみません。でも、どうしても声かけたくて」

「俺もやったことあるけど、男性店員が女性客をナンパするのは結構難度高いぞ」

今度は三谷先輩みたが言う。その言葉に、三浦さんはため息をついた。

「お前らがそういうことするから、俺もバカ呼ばわりされるんだよ」

三窪、三浦、三谷。俺たちは合わせて、バカ三トリオと呼ばれている。

「でも俺、彼女が好きなんですよ」

「一目惚れだろ。結局顔じゃん」

三谷先輩に、痛いところを突かれた。思わず「うつ」と胸のあたりを押さえる。

「でもでも、一目惚れって実際は内面からこう、ぐつとなんか、ぐつと来るもの、あるじゃないですか」

「……お前、なんか変態っぽいよな」

三浦さんは、彼女がいらない歴イコール年齢な人らしい。女性スタッフたちにそう囁かれているのを聞いた。本人には、怖くて本当のことかどうか聞き出せていない。

「今度、俺の大学の後輩と合コンやるんだけど、お前も来いよ」

「遠慮します。三浦さんを誘ってください」

「彼女、だいたい年上だろ? もっと若くていい子、いるって」

このとき三谷先輩はまだ就活中だった。就活が終わったらバイトで稼いだお金を

使って、卒業旅行は優雅に海外へ行くらしい。学生最後、パーツと遊ぶための女も必要だと言っていた。

「年上とか年下とか、関係ないですよ」

年齢を引き合いに出すなんて。恋愛は、年齢ではない。好きという気持ちですべてだ。「はい、目の前で堂々とさぼるな。しゃべるなら、休憩時間。合コンとか遊んでばかりいたらダメだからな」

三浦さんは休憩へ行った。本当は、合コンに誘ってもらえなかったことが悔しかったのだらう。普段はふざけていても怒らないのに、恋愛が絡む話になると注意してくる傾向がある。現に、この後しばらく口を利いてもらえなかった。合コンの主催者は俺じゃないのに。とんだとばっちりだ。

「お前、今いくつだっけ」

「はたち二十歳です」

「仮に、あの人が三十五とかだったらどうするんの？」

「なにがいけないんですか。いいじゃないですか、三十五」

三谷先輩は「マジかよ」と身震いしていた。

そんな会話をした後に、まさか三谷先輩の合コンで邑子さんの妹——池谷杏子ちゃ

んと出会うことになるとは、思ってもみなかった。もうこれは絶対に、神様が俺を全面的に応援してくれているとしか思えなかった。

兄弟姉妹がいるかないかを当てるといふ、その場で生まれたゲームをしていたときだった。俺の隣に座っていた小柄な女の子は、見るからに甘えん坊そうで、ひとりっ子かもしくは妹タイプだという話になった。

「七つ離れたお姉ちゃんがいるよ」

「めっちゃ離れてるじゃん」

俺は場を盛り上げるための、当たり障りのない会話を誰とでもしていた。その子は「お姉ちゃんとよく似てるって言われるんだ」と一枚の写真を見せてくれた。

そこに写っていたのが、俺がどうしても名前が知リたかった彼女だった。

「……え、これお姉ちゃん？」

「うん、似てるでしょ」

俺は思わず杏子ちゃんの手を握った。できれば、ハグだったかった。

「きょう、ここへ来てよかったあー!」

力いっぱいガッツポーズ。

池谷邑子さん。二十七歳。職業は事務。今は実家を出て、ひとり暮らしをしているらしい。杏子ちゃんと話して、これだけの情報を手に入れた。

杏子ちゃんが笑うと、まだ見ぬ邑子さんの笑顔を簡単に想像できた。俺が話しかけると警戒されてしまうし、いつも険しい表情で購入する本を選んだりしているから、笑顔が見てみたかった。

確かに、杏子ちゃんは邑子さんとよく似ている。でも、ふたりは全然違うタイプだろう。杏子ちゃんは栗色のショートカットで笑顔がよく似合う、太陽みたいな子だ。邑子さんは、月明かりのような、優しくしっとりとした美しさ。ふたりは間違いなく美人姉妹だが、その美しさは対照的だった。

大変失礼なことに承知しつつ、俺は正直に杏子ちゃんに訳を話した。お姉さんに一目惚れしたこと。話しかけたけれどうまくいかず、どうしたらいいか困っていたこと。杏子ちゃんは、真剣に俺の話を聞いてくれた。すぐにお互い連絡先を交換した。「あたしが仲を取りもってあげるよ」と言って、合コンの数日後に邑子さんと会って話せるようセッティングしてくれた。

突然ふたりだけで会うのは難しいので、まずは俺と三谷先輩、杏子ちゃん、そして邑子さんの四人でご飯でも食べに行こうという話になった。和洋折衷なんでもある店で、デザートも豊富だ。好きなだけソフトクリームを盛り付けられるし、ワッフルも焼ける。大きなチョコレートの噴水まであった。チョコレートフォンデュと言うらしい。でも、邑子さんの反応は微妙だった。杏子ちゃんによると、邑子さんは人見知り

が激しく、物静かなタイプらしい。趣味は読書と映画鑑賞。

「ご、ご趣味は？」

好きなものをそれぞれ皿に盛り、席についてすぐに沈黙が流れた。なにか話さなくては、と思わずそんなバカな質問を投げかけてしまった。

「なに言ってるんだよ、お前」

隣に座る三谷先輩が小声で言い、脇腹を突いてくる。

「ふたりは、駅前の本屋さんでバイトしてるんだって」

すかさず、杏子ちゃんが話題を変えてくれた。

「お姉ちゃんよく行くよね、あそこの本屋さん」

「……うん」

邑子さんの皿には山盛りのサラダ、トマト多め。ドレッシングはかかっていない。ヘルシー志向か。

「トマト、お好きなんですか？」

俺が訊ねると、邑子さんは一瞬フォークを止め、口角だけ無理やり少し上げた。どっちだ。好きなのか。嫌いなのか。いや、嫌いならトマトは取らない。やっぱり好きなんだ。「ちよっと来い」

着席してまだ五分と経っていないのに、俺は三谷先輩に引きずられ、退場した。

トイレに行き、手洗い場の前で「顔を洗え、なんなら水をかぶれ」と言われる。素直に言われた通り、顔を洗った。

「ちょっとは冷静になったか」

「俺はいつも冷静ですけど」

「バカ。さっきの会話じゃ、誰も落とせねえよ」

三谷先輩は、なぜさっきの会話じゃダメなのか事細かく話し始めた。まず、人見知りするような女性には直接声をかけると逆効果だと言った。特定の人ではなく全員にひとつの質問をすることで、無駄にプレッシャーをかけずにすむのだという。それから、女性が食べている物に対して言ってもいい言葉は「美味しそう」と「美味しい」だけなのだから。

「女っていうのはな、初対面の男と飯を食うときは気を使っただよ。なるべく自分を可愛く見せるために、普段は選ばないような料理を頼む場合もあるんだ」

早口でそう言って、ふうつとため息をついた。

「華奢な子がたくさん食べて、『よく食べる子です』ってアピールすることもあるけど。とにかく、人見知りタイプの女に、勢いよく接近するな。嫌われるぞ」

俺にはさっぱりわからなかった。どうして思ったことを聞いてはいけないのだろう。「わかったらさっさと顔拭いて、席に戻れ。あとは俺が話すから、お前はそれに合わ

せる。それくらいできるだろう?」

席に戻ってから三谷先輩が話し、俺はずっと「そうですね」「すごいですね」と合わせた。杏子ちゃんが邑子さんに話を振り、邑子さんがイエスカノーで返事をするという会話が延々と続いた。最後になって、全員で連絡先を交換し合った。

連絡先を手に入れてから、俺は決まって毎日だいたい同じ時間帯に連絡した。直接会って話すのが苦手なら、まずはメールからでもいい。文章でなら、きつと気持ちを表現しやすいと思った。

時々返事が来たり、時々返事が来なかったりする日々が、一か月ほど続いた。ちょうど夏だったので頭の中では、花火大会、夏祭り、海、バーベキューと盛りだくさんの行事を邑子さんと共にする妄想をしながら、俺の暑い夏は過ぎていった。現実には、バイトばかりの日々だった。

夏休みが終わって大学が始まる頃、俺は思い切って邑子さんをデートに誘った。しかし、あっさり断られた。映画に誘ったがハードルが高かったのか。だったら、と次は「お茶でも」と誘ってみた。それも断られた。ならば、きつと今は忙しい時期なんだろう。そう思っで一か月後にまた誘ってみた。しかし返事は同じ。

そこからずるずると、メールだけの日々がまた続いていった。進展させたいが、ど

う進めていいのかわからない。

夏が終わり、秋がやってきた。木の葉が少しずつ色づいてくるのを見てみると、だんだんと気持ち焦っていく。いつまでメールの返事を待つ日々が続くのか。俺は邑子さんと、このまま一ミリも距離が近づかないまま終わってしまうんじゃないか。

なにか、行動に移さなければ。俺は救世主に連絡を入れた。

「お姉ちゃん、本当に人見知り激しいんだよね。彼氏なんて、ずっといいないよ」

救世主は杏子ちゃんだ。一番邑子さんの近くにおいて、邑子さんをよく知っている。

「もう気づいてると思うんだけどね、恭介くんの気持ちには」

「ってことは、俺には望みなし？」

その一言を否定するわけでも肯定するわけでもなく、杏子ちゃんはカフェオレを飲んで「あたしにいい案があるよ」と言った。

杏子ちゃんの計画は、こうだった。

杏子ちゃんが仕事終わりの邑子さんと待ち合わせをする。そこに、偶然俺が通りかかる。そんなタイミングで邑子さんの携帯に杏子ちゃんから急に用事ができて行けなくなったと連絡が入る。すっぱかされた形の邑子さんを俺がどこかに誘って、思い切った告白するというものだ。本当にうまくいくのだろうか、と不安になったが、杏子ちゃんが背中を押してくれた。決行日はきょうだった。

ついさつき、俺はいかにも偶然を装い、邑子さんと会った。びっくりしていたけれど、計画されたものとは一切疑っていないみたいだった。しかし、杏子ちゃんから来られなくなったと連絡が入り、電話を切ったとたん、邑子さんは帰ろうとした。慌てて俺は引き留めたが、「どこかでゆっくり話でも」なんて雰囲気にはならなかった。俺がいけない。俺が、そういう雰囲気を作るのが下手くそだったからだ。

だからどうしようもなくなって、告白だけした。

そして現在に至る、わけである。

* * *

もつと時間をかければよかったのか。俺が猪突猛進ちよつもうしんしすぎたのか。それとも、願いのかけ方を間違えたか。

杏子ちゃんから、恋に効く神社——野良神社の話聞いた。邑子さんと会う前に、願掛けしに行った。

でもやっぱり、願いなんて叶わないじゃないか。

賽銭箱の前で、蹲る。

辛い。痛い。苦しい。身体の中が痛い。いや、外も痛い。あちこち痛む。

恋って、失恋したときって、こんなにも痛いのか。いいや、さっき転んだからか。ズボンの上から膝を触る。たぶん、出血しているだろう。

声に出して願いを言うなんて、バカみたいだ。

涙と鼻水でぐちゃぐちゃになった顔を拭おうと、頭を上げた。そのとき、柔らかいなにかが俺の頭に当たった。

風が吹いて、耳元で鈴の音が聞こえた。綺麗な、澄んだ音が響く。

猫がいた。真っ白で、雪みたいな猫だ。赤い首輪に金色の大きな鈴。瞳は青い。まるで宝石が埋め込まれているみたいだ。

「猫ちゃん……どうしてこんなところに」

子猫だろうか。身体はまだ小さい。両手に収まりそうなくらいだ。それなのに、抱き上げるとずっしり重たかった。

「首輪についてるじゃん。飼い主さんは？」

大切に育てられたのだろう。きつと、捜しているはずだ。こんなにも可愛い子猫を捨てるはずがない。

「飼い主さん、捜してあげるよ。きょうは寒いし。俺の家に来なよ」

きょうは少し寒い。これからもつと冬は深まっていく。ニャンコのおかげで、俺はちよつと温かくなった。

神社を出たところで、ズボンのポケットが震える。電話だ。

「どうだった？」

杏子ちゃんだ。

「玉砕でした！」

明るく言ったが空元気になってしまつて、杏子ちゃんが心配そうに訊ねてきた。

「大丈夫？ 今からそっち行くから。こういうときは、話すに限るよ」

「もう遅いし、俺は大丈夫」

「なんかてきとうに、元氣の出るもの買っていくね」

杏子ちゃんの声が消え、またしんと静かになる。

俺のアパートは学生に格安で提供しているボロ屋だ。でも、俺みたいに親からの仕事送りをもらわず、バイトだけでやっている人間には大変ありがたい。

ベットはもちろん禁止だ。でも飼うわけではない。だから、ちよつとくらい……と思っているが、やっぱりダメだろうか。

早く飼い主を捜さないと。きつと、今もどこかで必死に捜している。首輪もつけているから、飼い主がいるのは間違いない。どこかに名前とか住所とか、書いてないだろうか。首輪を探るが、なにもない。それにしても猫にはやっぱり、鈴なんだな。

頭を撫でようとすると、うーと唸って触らせてくれない。猫は人には懐かないと

聞いたが、今まで猫と触れ合ったことも飼ったこともないからよくわからない。触らせないわりに、大人しく抱かれてるのはなんだろう。

猫は家に入れるとびよんと手をすり抜けて、部屋の中をうろつき始める。匂いを嗅いだり、尻尾をゆらゆらと揺らしていた。

しばらく経って、杏子ちゃんが来た。ふたりでは食べきれないくらいたくさんのお菓子和お酒とおつまみを、わざわざ買ってきてくれた。

「ありがとう。俺なんかのために」

「こういうときは、飲んで話すと楽になる」

「見かけによらず、おっさんみたいだね。杏子ちゃんって」

どうぞ上がつて、と杏子ちゃんを部屋に上げると、部屋の汚さに初めて気が付いた。「ごめん。俺、最低だ」

「全然気にしないから、大丈夫」

散らかった物を足で隅の方へ押しやる。部屋の真ん中の小さなこたつテーブルに載っている物は、すべてベッドへ放り投げた。ベッドの上も汚い。服は山積みになっているし、部屋の掃除も最近ずつとしていない。こんな部屋に女の子を呼ぶなんて、失礼なんてもんじゃない。

「さあ、飲んで。気が済むまであたしに話してよ」

杏子ちゃんは汚い俺の部屋にちよこんと座り、こたつに足を入れた。俺は慌ててこたつのスイッチを入れる。

かんちゅう

杏子ちゃんは袋の中から缶酎ハイを二本取り出し、一本開けると俺に渡した。そして自分の分も開けた。

「ありがとう」

一口飲もうと傾けた瞬間、ぎゃつと杏子ちゃんが悲鳴をあげた。

「足になんか当たった！ なにっ？」

こたつの布団を上げ、中を覗き込む。そこで見た物に今度は別の悲鳴をあげた。

「可愛いっ！ 真っ白な猫ちゃん！」

杏子ちゃんが抱き上げようと手を伸ばす。白猫は小さな身体を振り、するりと手から逃げ出した。

「猫、飼ってるの？」

俺はうーんと唸った。拾った、では語弊があるし、誘拐だと思われたら嫌だ。

「それが、さっき神社で偶然見つけて。首輪をしているから、飼い主がいると思って保護したんだ」

「神社で猫ちゃんかあ。しかも白猫。なんかご利益ありそう。猫神様だったりしてね」そんなわけないか、と杏子ちゃんは酎ハイを一口飲んだ。

「猫神様……?」

「え? 知らないの?」

「知らねえの、お前だけだぞ」

腹の底から出したみたいない、低いおっさんの声。明らかに、杏子ちゃんの声ではない。

「……今、なにか言った?」

「え? だから、知らないのって」

部屋を見回す。テレビもついていない。当然、おっさんもない。隣の住民の声でもなさそう。両隣は確か、俺と同じ学生だったはず。

「お前に話しかけてんのは、オレだ」

小さなふわふわの白い毛糸玉みたいな猫が、俺を見上げている。目がくりくりだ。髭がヒクヒクしている。

こんな可愛い猫が?

いや、こんな可愛い猫という以前に、猫がしゃべった?

いやいや、猫、おっさんみたいな声だったけど?

「……ごめん、やっぱりちょっと……ひとりになりたいかも」

どうやら俺は、さつき相当ひどく転んだらしい。幻聴がする。

「そうだよ。ごめんね、押しかけちゃって」

「いや、そうじゃないんだけど……とにかく、ごめん」

杏子ちゃんは「気にしないで。また話したくなったらいつでも連絡して」と言って、買ってきてくれたものは全部プレゼントしてくれた。

俺は何度も何度も謝って、杏子ちゃんをドアの前で見送った。

ドアが閉まり、部屋が静まり返る。

さつき、頭なんて打ったかな。

そうだ。きつと、失恋のショックと日頃の心労が祟^{たた}ったんだ。だから、幻聴がしたんだ。

「それじゃ、今からオレと反省会だな」

白い猫が、こたつテーブルの上に座ってこちらを見ている。

「うわあああああ!? なにっ!」

「女みたいに騒ぐな。なにして、どう見たって猫だろうが」

「いや、そうじゃなくてっ!」

部屋の中をぐるぐる歩き回る。冷静になれ。冷静に。落ち着け、俺。

猫がしゃべった。猫がしゃべった。猫が……しゃべった。しかも、猫なのにおっさんみたいだ。というか、これは本当に猫なのか。

「ちょ……なんで、しゃべれんの?」

「昼間来たときも、面白い奴だなあと思ったけど。本当に面白いな、お前」

「昼間？」

昼間は大学に行って、バイトに行く前に神社へ寄った。大学にしゃべる猫はいない。神社でもしゃべる猫には会っていない。

「神社に来て、願っただろ。お願いお願い願いつて。お願いしか言ってなかったけどな」

目を細め、口元が少しくつと膨れた。

笑っているのか？ それは笑っている顔なのか？

俺は猫をじっと見た。

「見てんじゃねえよ」

低い声で言われると、相手が猫なのにちよつと怖い。すみません、と一言謝った。

「じゃ……じゃあ、本当に、神様……ですか？」

「おう。ちよつとその酒、オレに注いでくれよ」

杏子ちゃんの飲みかけの酒を、ふわふわの手で手招きしている。

見ているだけで、ご利益がありそうだ。

「あ、あの！」

俺は震えまくる手で猫神様に酒を注ぎながら、話しかけた。

「そんなコップじゃ飲めねえだろうが！ 皿、持ってこい！」

慌てて立ち上がり、汚れて散乱した食器の中からきれいな皿を取り出す。

「そうですね！ 飲めないですよ！ すみませんでしたっ！」

震えが止まらない手でもう一度、酒を注ぐ。

「久しぶりの酒だあ。公子の奴、酒だけは絶対に持つてこないからな。それに、最近のお供えものは猫缶やらの猫用のエサばかりで、もうそろそろ飽きてきたところだった」

「猫缶……ですか」

猫神様は、杏子ちゃんが買ってきた袋の中にすっぽり頭から収まり、中からおつまみのサラミを銜えて顔を出した。

「これも、皿に出してくれ」

「はいっ」

サラミと他のおつまみも全部皿に並べて、差し出す。猫神様は小さな赤い舌をペロツと出して、サラミに噛みついた。

「あの、それで、俺の願いなんです……」

「ああ、そうだったな。お前、名前は」

「三窪恭介です！」

まるで魔法のランプを手に入れたみたいな気分だ。俺、こんなにラッキーだっ

たっけ？

「じゃあ、お前の願い、言ってみろ」

「はい！」

これで、俺の願いは叶う。邑子さんと両想いになれる……！

俺は猫神様の前に正座して、鼻から大きく息を吸い込んだ。吐き出すと共に、大声で猫神様に願いを言った。

「俺、池谷邑子さんとお付き合いたいんです！ どうしても、彼女じゃないとダメなんです！ お願います！」

神様が味方してくれている。今日の前に、神様がいます。願いはなにかと聞いてくださっている。俺は世界で一番幸運な男だ。

汗ばむ両手を拳にして、猫神様の言葉待った。

「それじゃ、今言ったことを自分で叶えろ」

「……え？」

「オレが願いを叶えてやるのは、自分じゃどうしようもできない奴だけだ」

「でも俺、さっき邑子さんに振られたんです。気持ち悪いですって言われて……」

声に出すと、自分自身に一発顔面パンチしたみたいな気分になった。気持ち悪いと言われた俺に、まだ恋のチャンスはあるというのだろうか。どう考えたって、絶望的だ。

「諦めんのか？」

子猫がミルクでも飲むみたいな可愛らしい音を立てながら、猫神様は酒を飲んでいる。顔を上げて、俺を見つめた。

「お前、一回告白して振られたくらいで、諦めんの？ その程度の願いなわけ？」

神様にそう言われると、確かに俺の気持ちってそんなものなのかと思えてくる。不思議だ。

そうだ。ダメで元々だと思って告白したじゃないか。一回ダメだったくらいで諦めたら、絶対に願ひなんて叶わない。なに弱気になってんだ、俺。

「さっきの嘘です！俺、まだまだ立ち向かいます！」

「よし、その意気だ。まあ、とにかく飲め飲め！」

俺は猫神様に言われるまま飲んだ。ビールに耐ハイ、全部で六缶飲み干した。そのまま、俺は猫神様とひっくり返って眠ってしまった。

翌朝、頭がガンガンする中、目を開けると、猫神様はいなくなっていた。ゴミや空き缶が散乱した中をかき分けて捜したが、いない。

全部、失恋のショックから見た夢だったのだろうか。

大学へ向かい、講義を受ける。いつもと変わらない朝だ。大学が終わればバイト先へ向かう。

最近俺が毎日連絡するせいか、邑子さんはあまり店に来なくなってしまった。きのうは告白もしたし、なおさら来てくれる気がしない。

「あの人、来ないな」

三浦さんがしょぼくしてレジに立っている俺に声をかけてくれた。

「そうなんですよ。俺のせいですかね」

「追い回したりするからだろ」

「……」

「調子狂うな。お前が元氣ないと」

「三浦さん、恋ってしたことあります？」

「バカにしてんの？」

三浦さんの眉毛がぴくつと動いた。

「今まで恋だと思っていたのは、全部恋じゃないってわかったんです。今回の恋は、そういう恋なんです」

俺が言うと「ごめん」と三浦さんは謝った。

「俺、恋愛に疎いからさ。そういうのは、三谷と話せ」

バイトが終わると、真つすぐに家に帰る。きようは課題が多いのでとにかく早く帰って仕上げなければ、提出に間に合わない。帰ったらどう時間を使おうか、それを考え

て歩いた。

吐く息はまだ白くはならないが、冬がそとと近づいてくるのがわかる。

駅前の派手な電飾が目をちかちかさせた。クリスマスまでまだ二か月弱もあるのに、ハロウィンが終わったとたん、今度はクリスマス騒ぎだ。いや、目が眩むのは電飾のせいじゃない。手を繋いだり腕を組んだりして歩くカップルだ。ラブラブな様子を見ると、心に隙間風が吹いたみたいに寒くなる。俺の心はもう真冬だ。雪もちらついている。

考えてしまうのはよくないが、邑子さんと俺があんなふうに通を歩く姿が想像できない。心のどこかで、無理だろうともうひとりの自分が言う。

いや。そんなわけにはいかない。

きのう、猫神様に諦めないと誓ったじゃないか。

首を大きく振って、意識をまた課題に向けた。

「学生ってのは、忙しいんだな。それとも、こんな時間まで遊び回ってたのか？」
帰ると、ドアの前に猫神様がちょこんと座っていた。

「夢じゃ、なかったんですね！」

「なに寝ぼけたことを言ってたんだ。オレだってな、一日中お前と一緒にいるほど暇じゃねえんだよ」

「そうですね！ ごめんなさい」

確かに神様は俺たち凡人とは違って、仕事が山ほどあるんだろう。……あれ、でもきのう「願いは自分で叶えろ」みたいなこと、言ってなかったっけ？ 他にどんな仕事をしているのだろうか。

ドアの鍵を開けると、猫神様はすると部屋の中へ入っていった。

「あの、なにか食べますか？ 俺、まだ夜食べてないんで」

「お前が作るのか？」

「……あ、そうですね。俺が作ったものなんて、まずくて食べられないですよ。ちよつと、なんか買ってきます」

再び玄関のドアを開けたが、「お前が作ったものでいい」と猫神様は言った。

「そんな大したご飯作れないですけど」

「いいから、早く作れ」

猫神様は、俺のベッドにころんと寝転がって、毛づくろいを始めた。

「なに見てんだよ」

赤い舌をちょこつと出して、可愛い顔をしている。言葉と声が入ってこない。

「すみません。なんか、本当に普通の猫さんなんだなって」

「猫さんじゃねえ。猫神様だ」

「すみません」

神様と話なんてしたことがないから、どう話しかけていいのかわからない。いや、普通神様と話なんてできない。挙動不審になっても仕方ないだろう。

冷蔵庫の中を見る。週末買い物に行けなかったから、母さんが送ってきてくれた白菜と大根とプロッコリーと青梗菜^{ブロッコリー}。卵が二個。冷凍しておいた白米。肉はないが、チャーハンでも作ろうか。

「チャーハンなんて、どうでしょうか？」

「おう、オレはなんでも食える」

猫にチャーハン。聞いたことがない組み合わせだ。

冷蔵庫から食材を取り出して、いつものようにチャーハンもどきを作る。

最後に卵を入れるか、白米に卵を絡ませてから炒めるか。チャーハンは人によって作り方が違うと聞いたが、俺は母さんが作るレシピ（白米に卵を絡ませ炒める）しか知らない。

幼い頃から、よく料理をした。母さんは仕事で遅くまで帰ってこない。妹と弟もいるため、俺は自分から料理を始めた。最初はカップ麺にお湯を注ぐ程度だったが、冷蔵庫の中身から料理を考えるようになった。料理は好き、ではない。かといって嫌いなでもないが、慣れれば自炊した方がはるかに節約できる。

「いまどきの学生は、お前みたいな感じか？」

「俺みたいって、どんな感じですか？」

「自炊したり、バイトしたり。遊んだりしないのか？」

狭い部屋の中で、背中越しに猫神様と話をしながら考えた。他の学生は、どんな感じなのだろうか。

「どうなんでしょうか。バイトする学生は多いですけどね」

「ふうん」

「できましたよ、チャーハン」

「早いな。主婦みたいだ」

ベッドからむくっと起き上がり、こたつテーブルの上に座る。尻尾が微かに揺れていた。

俺は猫神様と向かい合って、チャーハンにスプーンを入れた。

「まだありますよ、たくさん食べてくださいね」

鼻息荒く、猫神様はチャーハンに顔を突っ込んでいた。「おう」と顔を上げると、鼻の頭にご飯粒がついている。取るべきか、否か。いや、触れていいものなのか。考えていたら赤い舌がペロツと出てきて、ご飯粒が口の中へ消えた。

「早くお前も食えよ」

俺が作ったご飯なのに。……まあ、いいか。

「猫神様、恋したことってありますか？」

「オレがか？ 笑わせるな」

「猫だから？」

チャーハンから再び顔を上げ、「バカにしてんのか？」と訊かれた。

「すみません、バカにはしてません。ただ、気になって。……恋ってなんですかね」

「人間の感情はわからん」

「邑子さんのこと、よく考えたら俺、なにひとつ知らないんです。だけど、めちゃくちゃ好きなんです」

「どういうところが？」

俺は初めて会った日の、邑子さんの横顔を思い出した。儚げで、悩ましい表情。寂しさ、虚しさを感じた。

「哀しい目をしていました、初めて会ったとき」

「つまり、悲愴に満ちた女が好きってことか」

「違います」

邑子さんは、哀しそうな表情で本を見ていた。きつと、この人には誰か好きな人がいる。いつだって、どんなときだって思い出してしまいうくらい、大好きな人が。俺に

は絶対に超えられない大切な人が。そんな気がして、目が離せなかった。

「俺が哀しみをなくしてやるとか、そんな大それたことは言えないです。俺、男前じゃないし」

「わかってんじゃねえか」

「邑子さんの哀しげな顔が、ずっと頭から離れなくて。笑ってほしいなって思っただす」

「笑ってほしい、ねえ。……きょうは、酒ないの？」

「ないです。買ってきましたか？」

猫神様は大きなあくびをすると「いや、いい」と言っ、また横になった。もうチャーハンが消えている。

「どうしてその邑子じゃなきゃダメなのか、オレにはわからねえな。女なんて、世界中にいくらでもいるだろ」

自分の気持ちを、うまく言葉にできなかった。邑子さんは、確かに美人だ。ひとつひとつの仕草が丁寧で、まるでハーブを奏でる天使のように見える。大した話はない。なにが好きで、なにが嫌いか。今までどんな経験をして、なにが嬉しかったのか悲しかったのか。俺はなんにも知らない。

「邑子さんは高嶺の花で、俺なんかが頑張ったところで手は届かないのかもしれないませ

んね」

「だから、人間はオレに願うのさ。神様仏様ってな。誰かに願いを叶えてもらおうなんて、ちゃんちゃらおかしい」

俺はびくつとして、猫神様を見た。相変わらず、柔らかそうなお腹を見せて毛づくろいに集中している。

「誰かがなんとかしてくれるなんて、期待するな。誰かに幸せにしてもらおうなんて考えてねえで、自分で自分を幸せにしろ」

「かっこいい……。名言、いただきました！」

「お前、本当にバカだよな」

へへ、と笑うと鼻水が出た。手で拭い、山盛りのチャーハンをスプーンですくう。ひとりじゃないって、いいな。そんなことを思いながら、口にチャーハンを放り込む。田舎から都会に出てきてひとり暮らしを始めたばかりのとき、この部屋でご飯を食べていると寂しくて、泣きそうになった。ずっと、ひとりの世界に憧れていたはずなのに。

幼い頃、父さんは仕事で事故に遭い亡くなった。それ以来、母さんが必死に働いて俺たち三人の子を育ててくれた。母さんは看護師だ。夜勤もあるし、不定休なので、祖父母の家によく預けられていた。妹弟の世話もあり、いつも誰かと一緒だった。

鬱陶^{うつとう}しいなんて思ったことはないが、ひとり暮らしがどんなものか懂^{しる}れていた。でも、全然いいものじゃない。生活する大変さを身に染みて感じる。

大学も二年目になり、友達ではきた。でも、大学とバイト先と家を行き来するだけで、遊びとは無縁の生活をただ繰り返している。だから部屋に誰かを呼んだのも、きのうの杏子^{けいこ}ちゃんが初めてだった。

時々、漠然^{ぼくぜん}と田舎に帰りたいと思う。自分がなをを目指しているのか、よくわからなくなる。都会は息もしづらい。大学の学生たちともなんとなく話が合わなくて、地元の友達が懐かしいときもある。

母さんは、俺が県外の大学を志望しているのを知っていた。志望していたけれど、行かないと決めていた。母子家庭の俺が、しかも三人も子がいる家庭の俺が、大学なんて望めない。高校を卒業したら働くのが親孝行だとわかっていた。でも、理解はしていても本音は行きたいと願っていた。

「自分が進みたい道へ行きなさい」

母さんの一言で、家族を置いて家を出た。

俺の家は裕福な家庭ではなかったが、家族の繋がりは強い。父さんが亡くなってからも、父方の祖父母、母方の祖父母がいつもよくしてくれた。だから、幼い頃から寂しさなんて感じたことが一度もなかった。

それなのに、都会は寂しい。

家計の足しになればと、高校時代は新聞配達のバイトをしていた。なにか少しでも力になりたかった。

引越しの日、母さんから分厚い封筒を手渡された。俺が家に入れていたわずかなバイト代を、そっくりそのまま残しておいてくれたのだ。

「あんたが自分で稼いだお金だから、自分のために使いなさい」

大学の学費も、母さんが出してくれた。大学へ行くための費用は、バカみたいに高い。俺は家族みんなに学ばせてもらっている。俺の頭がもつとよければ、国立大学に行って学費も抑えられただろうに。将来は弁護士や医者、有能な人材を目指せたのかもしれない。それに、妹や弟にだって夢があるはずだ。大学を卒業したらしっかり働いて、今度は俺が返す番だ。俺と同じように、妹や弟にも進みたい道へ行ってほしい。でも。

やるべきことはわかっていたはずなのに、最近はずっと足踏みしている。突然、自分の夢が巨大すぎて、叶えられない気がしてきた。弱気になっている。

俺は福祉の大学に通い、介護福祉士や社会福祉士を目指している。人の役に立つ仕事、それが俺の夢だ。だけど近頃は自分の思いが、恋に關しても夢に關しても一方通行だ。邑子^{むすこ}さんへの想いもうまく伝わらないし、頭に霧がかかっているみたいだった。

「バカみたいに真剣な顔をしてるな」

猫神様の声に、我に返る。

「早く食え」

口に入れながら、やっぱりちよつと母さんの味とは違うなあと思った。なにが足りないのだろう。わからない。

「いいな、学生ってのは。夢がいっぱいあって」

「俺の夢、わかるんですか？」

「お前を見てりゃわかるよ、そんなこと。顔に書いてあるからな」

「さすが、神様ですね」

まあな、と言いながらまた丁寧な毛づくろいをする。ちら、と俺を見たとき赤い舌が少しだけ出ていた。

「よくわからんが、とにかく後ろは振り返るな。前だけ見ても」

見透かされたようだった。神様の前では、自分は偽れない。

とにかく、前進しよう。猫神様もそうおっしゃっている。元気だけが取り柄の俺。頑張れ、俺。

自分で自分に活を入れ、ご飯を食べ終わってから課題に取り掛かった。

気が付いたら、机に向かったまま朝を迎えていた。猫神様は人間みたいにへそを天

立ち読みサンプル はここまで

井に向け、ぐっすり眠っていた。太陽がカーテンの隙間から俺の部屋を照らしている。

朝は冷え込む。寒さに反して、窓から射す光は炎のように温かそうだ。

夜に感じる一抹の寂しさは、朝が連れ去ってくれる。でもきょうは、それ以外にも連れ去ってくれたものがある。

いつもと同じように、俺は邑子さんにメールを送った。

『おはようございます。昨夜は勉強中に寝落ちてしまい、起きたら朝でした。今朝は寒いので、風邪には気を付けてください』

鬱陶しいと思われるかもしれない。返事もくれないかもしれない。それでもいい。

邑子さんがちよつとでも、俺のメールを読んでなにか思ってくれたら、それで十分だ。

『ありがとうございます。恭介くんも気を付けて』

珍しくすぐに短い返事が返ってきた。

っしやー！ と小さな声でガッツポーズ。ぐーつと背中を伸ばして、気持ちよさそうに眠る猫神様を見た。

幸せそうだ。幸せ以外、ありえないという顔をしている。

俺は天にも昇るような嬉しさを隠せず、小躍りしながら出かける準備をささっとして、猫神様を起こさないよう静かに家を出た。